

ESPER



アクア
イラスト/まりも

ESPER

目次

序章	3
第 1 章	18
第 2 章	38

3 序章

紫陽花学園の生徒、露草 葵が一人で登校している。

葵は通学鞆にひよんなことから手に入れた護身用のダガーナイフを入れていたが、臆病で、気弱な性格から握ることができなかった。この護身用のダガーナイフにサイパワーが秘められていることを知らなかった。

エスパ―、人間の知覚以外の力、テレパシー・テレキネシス・テレポーテーションなど、常人にはない力を持つ人間。超能力者。誰もが本当にいるのだろうかと疑問を抱いていた。

葵が通学路を歩いていると、突然、火が発生した。エスパ―の超能力のひとつである発火能力（パイロキネシス）で発生した火である。だが、葵は知らなかった。

「な、何だ？ この火？」

火はあつという間に炎となり、葵に近づいた。

「け、消さないと、火事になる。水はどこかにないか」

葵は水を探すが、周辺にはない。このまま、消火することができないので、怖くなり、通学鞆を地面に落として逃げ出したが、炎が葵を勢いよく包み込んだ。

「う、うわああああああ！」

4 序章

葵は炎に包まれて叫び声をあげた。

「……」

黒いワンピースを着、黒いハイヒールを履いた女が沈黙したまま葵の様子を隠れて見ていた。発火能力（パイロキネシス）を持つエスパード、火を発生させた張本人である。

葵を勢いよく包み込んだ炎が消えると、葵は意識を失い、倒れた。炎で焦げて黒くなっていた。黒いワンピースを着、黒いハイヒールを履いた女の姿はなかった。

「……うう」

葵が意識を取り戻したのは、紫陽花学園の保健室のベッドの上だった。

紫陽花学園の養護教諭、綾原 ヒノキは吸っていたタバコを灰皿に押し付けて消すと、座っていた椅子から立ち上がり、葵が寝ているベッドに近づいた。そして葵が寝ているベッドの側にいて葵の顔を覗き込んだ。

「気がついたか」

「あ、綾原先生。こ、ここは、保健室」

「そうだ」

保健室にタバコのおいがこもっている。綾原がヘビースモーカーだからだ。葵はタバコのに

5 序章

おいでここが保健室だとわかった。

「通勤途中、倒れているおまえを見つけた」

「綾原先生が介抱してくれたのですね」

「そうだ」

葵は綾原によって、保健室に運ばれ、介抱された。だが、綾原は普通ではつけられるはずのないエスパーによるダメージを受けた葵を見て不審を抱いていた。

葵は寝かされていたベッドから身を起すと、炎による全身の火傷が完治していることに気づいた。意識不明の重体だった僕がなぜ回復できたのか？ と疑問に思った。

綾原はネクタイに途中手に入れた人間がエスパーに変身できるESPアイテムのひとつであるESPネクタイピンを付けるようになってからエスパーに変身するようになり、治癒能力（ヒーリング）で怪我をして痛がっている生徒をおさえこんで治している。ドクターキヤビネットの薬品はサイパワーがなくなると、エスパーから人間に戻り、時間経過で回復するまで、エスパーに変身できなくなるので、その時に使っている。生徒には治癒能力（ヒーリング）の効果があるESPネクタイピンのことを隠している。

葵はベッドから降りると、

「綾原先生、ありがとうございます。僕は教室に向かいます」

と言って、綾原が持つ不思議な力のことを聞かずに保健室を出ようとした。

6 序章

「待て、露草」

綾原は葵が保健室を出ようとしたところを呼び止めると、預かっていた通学鞆を葵に渡そうとした時、中身が見え、護身用のダガーナイフを目にした。

「こ、これは」

綾原は護身用のダガーナイフにESPネクタイピンに共通するEの紋章が浮かび上がる宝玉が埋め込まれていることから護身用のダガーナイフはESPアイテムだということがわかった。

葵の護身用のダガーナイフは、人間がエスパーに変身できるESPアイテムのひとつであるESPダガーである。サイパワーを全て消費して、相手に致命的なダメージを与える効果がある。

「露草、おまえに打ち明けることがある」

「え？」

「ESPアイテムのことだ」

「ESPアイテム？」

「おまえの通学鞆に入っているこの護身用のダガーナイフはESPアイテムのひとつであるESPダガーだ」

「ESPダガー？」

「ESPアイテムのことは秘密にしていたが、おまえが私と同じESPアイテムの所持者であるからには話しておきたい」

葵は綾原から通学靴を受け取ると、中から護身用のダガーナイフを取り出した。

「こ、これが、ESPアイテムのひとつであるESPダガー」

葵はESPダガーをじっと見つめた。埋め込まれているEの紋章が浮かび上がる宝玉から何か不思議な力を感じる。

「ESPアイテムを入手した人間は、エスパーに変身することができる。だが、サイパワーがなくなると、エスパーから人間に戻り、時間経過で回復するまで、エスパーに変身できなくなる」
「で、では、綾原先生が意識不明の重体だった僕を回復できたのは？」

綾原はネクタイに付けているESPネクタイピンを葵に見せて、

「このESPアイテムのひとつであるESPネクタイピンの治癒能力（ヒーリング）効果だ」と言っ、葵の問いに答えた。

「そうだったのですね」

葵は納得した。

「見せてやろう」

綾原はメデイカルはさみで自分の手を深く切りつけた。綾原の手から出血している。

「あ、綾原先生、何を」

「いいから見るのだ」

葵が綾原を心配そうにじっと見つめると、綾原はESPネクタイピンによってエスパーに変身

した。

綾原の頭髮が逆立ち、目が激しくつり上がっている。

「こ、これは」

綾原の額にEの紋章が輝くと同時に、治癒能力（ヒーリング）により綾原の手の切り傷が完治した。

「！」

葵が驚くと、綾原はエスパーから人間に戻り、

「これが私のESPネクタイピンに秘められたサイパワーだ」と言った。

「……」

葵はしばらく沈黙して、

「ぼ、僕もこのESPダガーによってエスパーに変身することができるのかな」

「できるさ。試してみるか」

「え、ええ」

葵はESPダガーによってエスパーに変身した。

葵の頭髮が逆立ち、目が激しくつり上がっている。

「これがESPダガーによってエスパーに変身した俺、いや僕か」

9 序章

葵はドクターキャビネットのガラスに映った自分の姿を見つめ、

「ESPネクタイピンによってエスパーに変身した綾原先生と同じですね」と言った。

「ああ」

綾原はニヤリと笑うと、

「超能力を使ってみろ。そうだな、念力、念動力（サイコキネシス）でこれを触らずに動かしてみろ」

と机に置かれた消毒器具を指さして言った。

「はい」

葵の額にEの紋章が輝くと同時に、念力、念動力（サイコキネシス）により机に置かれた消毒器具が宙に浮き、再び机に置かれた。

「これが超能力ですか」

「そうだ」

「……」

葵はしばらく沈黙して、エスパーから人間に戻り、ESPダガーをじっと見つめた。

「これが僕のESPダガーに秘められたサイパワーですか」

「そうだ」

「ESPアイテムのことは綾原先生から聞いて、初めて知りました」

「そうか」

人間がエスパーに変身できるESPアイテムはエスパー、天火、蓮華によって作り出されたものである。天火は発火能力（パイロキネシス）を持つエスパーである。火を発生させ、登校中の葵に重症を負わせた張本人であるが、綾原と葵は天火を知らなかったし、見たこともなかった。天火はなぜESPアイテムを作ったのか、理由は誰も知らない。

「我々以外に、ESPアイテムの所持者が、存在するのでは？」

綾原は疑問を抱いた。

「もし存在するとしたら」

「私のように人のために超能力を使うESPアイテムの所持者であれば良いが、悪いことをするために超能力を使うESPアイテムの所持者であれば、大変なことになるだろう」

「ぼ、僕は人のために超能力を使うESPアイテムの所持者ですよ」

「おまえはまじめでやさしいからな、わかっている」

「ESPアイテムは誰が作ったのでしょうか」

「恐らくエスパーだろう」

「え！ エスパーですか！」

葵はエスパーはいるとは思っていなかったので驚いて言った。

「そうだろう」

「エスパーは本当にいるのでしょうか？」

「わからない、だが、ESPアイテムがこうしてあることからいることは間違いないだろう」
「いるとしたら、登校中に発生した火はエスパーの超能力によるものだったのでしょいか？」

エスパーはいると思った綾原は、

「そうだったかもしれない」

と言って、葵の問いに答えた。

「……」

葵は怖くなり、沈黙してしまった。

しばらく沈黙が続いた後、

「綾原先生、我々以外に、ESPアイテムの所持者、エスパーが存在しているか確認します」

葵はびくびくしていたが、恐れているはダメだと思い、勇気を出して、ESPダガーを持った手を握りしめ、決意をした。

「そうか、私も同行したいが、私は保健室の先生だからここにいないなければならない。だが、露草、怪我をしたらここに来なさい。治療をするから」

「遠い場所において、来れなかったら」

「瞬間移動（テレポート）を使いなさい。ここにすぐに来れるから」

「し、瞬間移動（テレポート）ですか」

「ああ」

「超能力でしょうか」

「そうだ」

「超能力はたくさんあるのでしょいか」

「ああ、念力、念動力（サイキネシス）、瞬間移動（テレポート）の他にたくさんある」

「超能力について、よく知っていますね」

「ああ、超能力については、ESPアイテムを入手し、エスパーに変身することができるようになってから知った」

「そうですか」

「おまえもこれから知るだろう」

「そうですね」

「注意しておきたいことはサイパワーがなくなると、エスパーから人間に戻り、時間経過で回復するまで、エスパーに変身できなくなることだ。だから、超能力を使いすぎて、サイパワーをなくしてしまうことがないように、サイパワーの消費を考えて、超能力を上手に使うようにすると良い」

「綾原先生、わかりました。では、僕は教室に向かいます」

「待て、露草」

綾原は葵が保健室を出ようとしたところを呼び止めると、葵が持っていたESPダガーを取り上げた。

「綾原先生、何を」

綾原は葵のベルトにESPダガーを仕込ませた。誰にも見えないようにベストで隠してある。

「ESPアイテムは身に着けていないと、使えないからな、通学鞆に入れてはダメだ」
「なるほど」

葵はベストを上げて、綾原がベルトに仕込ませたESPダガーを確認して、

「よし」

と言って、ベストを下ろした。

「ありがとうございます。綾原先生」

「いいか、露草、登校中に起きたこと、ESPアイテムのことは、私以外の者には秘密にしておきなさい。騒ぎになるから知られてはいけない。わかったか」

葵は確かにそうだろうと思い、

「はい、わかりました」

と言った。

「さあ、教室に向かいなさい」

「はい」

「気をつけて」

「ありがとうございます」

葵は綾原に礼を言うと、教室に向かった。

保健室を出て行く葵を、綾原はじっと見守っていた。

葵が保健室からいなくなると、綾原はESPネクタイピンに埋め込まれているEの紋章が浮かび上がる宝玉の色を見た。

「黒か。これではサイパワーが時間経過で回復するまで、エスパーに変身できないな」

ESPアイテムに埋め込まれているEの紋章が浮かび上がる宝玉の色はサイパワーがマックスの時は赤だが、なくなると、黒になる。

綾原は重傷の葵を治療した時に、サイパワーをかなり消費した上で、葵にESPネクタイピンに秘められたサイパワーを見せたので、サイパワーをなくしてしまった。

綾原はポケットからタバコとライターを取り出して火をつけた。

「一服するか」

と言って、タバコを深く吸い込んで、空を仰ぎ見るように吐き出した。

「露草」

葵の行く末を保健室で見守っている。

15 序章



葵は保健室を出てから我々以外に、ESPアイテムの所持者が、エスパ―が存在しているのだろうかと教室に向かうまでずっと疑問に思っていた。

葵が教室に向かうと、授業は既に始まっている。四人の葵のクラスメイトが近寄って来た。

「おはよう。葵、遅かったわね」

「おはよう。露草、遅かったな」

「おはよう。露草、待っていたぞ」

「おはよう。露草、待っていたのよ」

四人の葵のクラスメイトは、葵の登校が遅かったので、トイレに行くと言って授業を抜け出して廊下で待っていた。

「おはよう。あやめ、瞳子、桐島くん、鈴代さん」

四人の葵のクラスメイトは空手が得意で、葵の恋人である京紫 あやめ、男みたいな喋り方と態度から、まさに「男みたいな女」と感じられる有田 瞳子、責任感の強い桐島 悟、桐島の恋人である鈴代 幸。葵の親友グループである。葵とは別々に登校、一緒に下校している。

「露草、まじめなおまえが遅刻するとは、どうしたのだ」

葵は桐島に遅刻した理由を聞かれると、綾原に言われた通り、登校中に起きたこと、ESPア

アイテムのことは、綾原以外のあやめ、瞳子、桐島、幸には秘密にして、

「寝坊して遅刻してしまった」

と嘘を言った。葵はまじめで嘘をつくのは苦手だったが、本当のことを言ってしまうと、綾原が言った通り、騒ぎになると思ったので、頑張って嘘をついた。

「マジかよ！」

嘘だとは知らず、桐島が笑って言った。

「あはははは」

あやめ、瞳子、幸も、一斉に笑った。

葵はあやめ、瞳子、桐島、幸に嘘を言ったら、笑われてしまった。さすがに恥ずかしかった。嘘だと言いたかったが、我慢した。

「……」

葵は何も言えず、ただただ沈黙していた。

しばらく沈黙が続いた後、

「遅くなって、ごめん。待っていてくれて、ありがとう」

葵は礼を言い、あやめ、瞳子、桐島、幸と教室に入ってしまった。

葵はESPアイテムをあやめ、瞳子、桐島、幸に臆病で、気弱な性格で、助けられた分、ESPアイテムをあやめ、瞳子、桐島、幸を助けるために使うことを心掛けた。

第一章

葵が教室に入ると、あやめ、瞳子、桐島、幸が近寄って来た。

「おはよう、葵」

「おはよう、あやめ」

「聞いてくれよ、露草」

「何だい、瞳子」

「露草、今日、このクラスに転校生が来る」

「本当かい、桐島くん？」

「ああ」

「どんな子だろう、気になるよね、露草」

「そうだね、鈴代さん」

転校生が来るという情報をいち早くキャッチしたあやめ、瞳子、桐島、幸から聞いた葵はどんな人が来るのか、気になった。

（転校生はESPアイテムの所持者だろうか）

葵はそう思った。もしも転校生がESPアイテムの所持者だったら、葵にとって問題になるこ

とが起きる。自分がESPアイテムの所持者だということを知られたら、綾原以外の者には秘密にしているESPアイテムのことをあやめ、瞳子、桐島、幸に知られてしまい、騒ぎになること、悪いことをするために超能力を使うESPアイテムの所持者であれば、大変なことになることだ。「転校生って、男かな？ 女かな？ 男だったら、付き合おうか」

瞳子が恋人欲しさに言った。葵とあやめ、桐島と幸が恋人同士であることから、自分だけが恋人がいらないと思うようになったからである。

「おまえは男みたいな喋り方と態度から、まさに『男みたいな女』と感ぜられるからな。恋人が欲しいなら、女らしくしろ」

霧島が瞳子に言うと、女らしくしようと改善を試みてもうなくいかない瞳子は黙り込んでしまった。

「言い過ぎよ、悟。瞳子、あなたがどんな人であろうと、好きになってくれる人は必ずいるわ」

「すまない、瞳子」

「いや、霧島の言うとおりだから。ありがとう。幸」

「転校生が男だったらいいな瞳子、付き合えよ」

「ああ、いやええ」

葵、あやめ、瞳子、桐島、幸が転校生について話をしていると、チャイムが鳴るのとほぼ同時に、ガラスと教室のドアが開き、このクラスの教諭である水沢 諭と、転校生の女子生徒が入っ

て来た。

(女だ。瞳子、残念だったな)

桐島が瞳子を見て思ったと同時に、

(何だ女か)

瞳子がそう思って、がっかり肩を落とした。

水沢が転校生の女子生徒と並んで教壇に立つと、

「みんな、席に座れ。転校生を紹介する」

と、言っただけで立っている葵、あやめ、瞳子、桐島、幸を席に座らせてから、黒板に『柳 薫』と書き始めた。

「彼女は転校してきた柳 薫だ。みんな、仲良くしてあげてくれ」

葵、あやめ、瞳子、桐島、幸は黒板に書かれた薫の名前を「柳 薫」と小さい声で呟きながら、薫を見つめていた。薫の顔と名前を一致させて、薫の名前を覚えるためだった。

「柳、みんなに自己紹介を」

「はい」

水沢に紹介されて、自己紹介をするよう、指示された薫は頷き、葵、あやめ、瞳子、桐島、幸を見つめた後、自己紹介を始めた。

「初めまして。渚学園から転校してきました柳 薫です。宜しくお願いします」



薫が自己紹介を終えると、笑顔を見せたので、葵、あやめ、瞳子、桐島、幸は笑顔を返した。
「じゃあ柳、あの席へ」

水沢がそう言って指指したのは葵の席の後ろの空席だった。

(僕の席の後ろか)

露草はそう思うと、ベルトに仕込んだESPダガーを誰にも見られないように隠しているベストが何かの拍子でめくれてしまわないように気をつけるようにした。めくれたまま座っていると、椅子の背と座の間があいているところから薫にベルトに仕込んだESPダガーを見られてしまうからである。

水沢に席に座るよう、指示された薫は葵の席の後ろの席に座った。

葵は後ろの席の薫に挨拶をするため振り向いた。その拍子にベストがめくれてしまったが、気がつかなかった。

「僕は露草 葵だ。宜しく、柳さん」

「宜しくね、露草くん」

「葵と薫は互いに挨拶を交わした。」

それからあやめと薫は見つめ合った。

「私は京紫 あやめよ。宜しくね、柳さん」

「宜しくね、京紫さん」

あやめと薫は互いに笑顔を見せながら、挨拶を交わした。

それから瞳子と薫は見つめ合った。

「私は有田 瞳子だ、宜しくな、柳さん」

「宜しくね、有田さん」

瞳子と薫は互いに笑顔を見せながら、挨拶を交わした。

それから桐島と薫は見つめ合った。

「俺は桐島 悟だ、宜しく、柳さん」

「宜しくね、桐島くん」

桐島と薫は互いに笑顔を見せながら、挨拶を交わした。

それから幸と薫は見つめ合った。

「私は鈴代 幸よ、宜しくね、柳さん」

「宜しくね、鈴代さん」

幸と薫は互いに笑顔を見せながら、挨拶を交わした。

「僕たち、友達なんだ。だから、柳さんも僕たちと友達になろう」

「ええ、露草くん」

薫は葵の誘いを快く受けた。

「じゃあ、休み時間にね」

葵は薫にそう言うと、前を向いた。めくれたベストはそのままだった。めくれたベストからベルトに仕込んだESPダガーがちらっと見える。薫はそれを見てから、

（私が首にかけているペンダントと同じEの紋章が浮かび上がる宝玉が埋め込まれているわ。露草くんは私と同じESPアイテムの所持者だったのね）

インナーペンダントとして制服の中にそっとしのばせているペンダントを見てそう思った。

薫は葵が自分と同じESPアイテムの所持者であることを知った。

薫がインナーペンダントとして制服の中にそっとしのばせているペンダントは人間がエスパーに変身できるESPアイテムのひとつであるESPペンダントである。エスパーの超能力を跳ね返す効果がある。

こうして葵はベルトに仕込んだESPダガーを誰にも見られないように隠しているベストがめくれてしまったことにより、薫に見られてしまった。何かの拍子でめくれてしまわないように気をつけるようにした矢先の出来事であった。これから先、薫が自分と同じESPアイテムの所持者であることを知ることになる。

（露草くんのESPアイテムの力を確かめる）

薫はESPアイテムのことをESPアイテムの所持者以外の者には言わないようにしている。そのため、葵のESPアイテムの力を確かめるには葵が一人である時が良い。

授業の間の休み時間になると、薫は葵、あやめ、瞳子、桐島、幸と一緒にいながらも、葵が一

人である時を狙っていたが、葵はあやめ、瞳子、桐島、幸といつも一緒にいるため、なかなかその時がなかった。

昼休みになると、薫はひとりで屋上上がった。そこには葵がひとりでいた。いつもはあやめ、瞳子、桐島、幸と昼休みを過ごす葵だったが、この日はたまたまあやめ、瞳子、桐島、幸とは別々だったため、ひとりで過ごしていた。

(今なら露草くんのESPアイテムの力を確かめられるわ)

薫はそう思うと、葵にESPアイテムのことを聞こうと近寄ろうとしたが、あやめが屋上に上がって来た。

「葵」

葵に声をかけ、薫の目の前を通り過ぎたあやめは葵のところに行って行った。

「あやめ」

「ここにいたのね、葵」

「うん」

「ふたりきりで話そうか」

「そうだね」

薫は葵とあやめに見つからないよう、屋上にある貯水タンクに身を隠し、葵とあやめの様子を陰から見ている。

あやめは葵に聞いて欲しいことがあった。

「葵、聞いてくれる？」

「うん。何だい？」

「私の前に空手のライバルが現れたのよ」

「へえ、あやめの空手のライバルか。誰なんだい？」

「緑川 斗希よ」

「緑川 斗希か。ここ紫陽花学園の生徒かい？」

「違うわ。燕学園の生徒よ」

あやめは道場に通り、空手を習っている。そこで、燕学園の生徒である緑川 斗希と出会い、一戦することで、ライバル意識を燃やされたのだった。

「緑川さんは強いのかい？」

「ええ。私のように空手だけでなく、柔道もしているわ」

「へえ、格闘少女なんだね」

「そうよ」

「緑川さん、強いんだね」

緑川は道場に通り、空手と柔道を習っている。格闘少女であるので、あやめにとって自分が習っていない格闘技を習っていることから、強者であった。

「私、緑川さんと真剣勝負をすることになったの」

「そうか。あやめ、負けないでね」

「ええ。緑川さんに勝つわよ！」

あやめがそう言っつて葵に空手の構えを見せた瞬間、

「きゃっ」

あやめの体が突然宙に浮いた。

(あやめ、この力はテレキネシス)

葵はエスパーが近くにいるのかと思ひ、周囲を探したが、エスパーは見つかかなかつた。

(エスパーは近くにいるはずだ。探して、あやめを下ろしてもらわないと)

葵がそう思ひながら、エスパーを探している間に、あやめは落下したら危険な高さまで上昇していた。

「助けて、葵！」

「あやめ！」

葵が宙に浮いて、助けを求めているあやめを見た瞬間、あやめが突然落下した。

「きゃああああっ!!」

あやめは悲鳴を上げて落下する中、意識を失った。

「あやめ！」

葵はESPダガーによってエスパーに変身した。

テレキネシスを自分にかけて空を飛ぶことによって、上から落ちて来たあやめを葵は空中で受け止めた。

（あやめ、良かった）

葵は意識を失っているあやめを見て、そう思った。ESPアイテムをあやめを助けるために使ったからであった。

葵が着地して、あやめを抱き下ろすと、屋上にある貯水タンクに身を隠していた薫がESPペンダントによってエスパーに変身した姿で葵の前に現れた。

「柳！」

「見せてもらったよ、露草、あんたのESPアイテムの力を」

「おまえのその姿、ESPアイテムによってエスパーに変身した姿ではないか」

「そう。あんたと同じESPアイテムの所持者だからね」

「俺と同じESPアイテムの所持者だと」

「見せてやるよ。私のESPアイテムを」

薫はそう言うのと、服の首もとから取り出したESPペンダントを葵に見せた。

「それはEの紋章が浮かび上がる宝玉が埋め込まれているESPアイテム」

「そう。ESPアイテムのひとつ、ESPペンダントだよ」

薫はそう言うと、ESPペンダントを服の中にしまいこんだ。

葵はあやめをテレキネシスで宙に浮かせて、落下させたのはESPアイテムによってエスパーに変身した薫ではないかと疑った。

「柳、あやめをテレキネシスで危険な目に遭わせたのはおまえだな？」

葵が薫に問いたですと、そうだと薫は答えた。

「どうして、こんなことをした」

「あなたのESPアイテムの力を確かめたかったからだよ」

「何だと？ おまえ、俺がESPアイテムの所持者だということをどうして知ったのだ？」

「ああ。水沢先生に紹介され、自己紹介をして、あなたの席の後ろの席に座った時、あなたが持つESPアイテムを目にしたからね」

「そうだったのか」

葵はあの時、ベルトに仕込んだESPダガーを誰にも見られないように隠しているベストが何かの拍子でめくれてしまったことに気づかなかったために、薫が見て、自分がESPアイテムの所持者だということを知ったのだとわかった。

「京紫には悪いことをしたと思っっているよ」

薫は意識を失っているあやめを見て言った。

葵はあやめのいるところで薫に自分がESPアイテムの所持者だということを知られ、薫とESPアイテムの話をしてしまったが、あやめが意識を失っていることで、綾原以外の者には秘密にしているESPアイテムのことをあやめに知られることは避けられた。

疑問を抱いた綾原が言ったことを、葵はふと思いついた。

——我々以外に、ESPアイテムの所持者が存在するのでは？——

葵はESPアイテムによってエスパーに変身した薫の姿を見たことで、自分と綾原以外に、ESPアイテムの所持者が存在しているか確認でき、綾原が抱いていた疑問が解けたことになる。

「私以外に、ESPアイテムの所持者が存在していることがわかって、面白くなってきたよ」

薫がふふっと笑って言った。

ひととおり話をし終えた後、

「じゃあな、露草」

薫が葵に背を向けて立ち去ろうとすると、葵が呼び止めた。

薫が振り向くと葵は、

「柳、おまえは何のために超能力を使う」

と言った。薫が人のために超能力を使うESPアイテムの所持者なのか悪いことをするために超能力を使うESPアイテムの所持者なのか確かめるためだった。

薫は笑みを浮かべて、

「さあね、私は何のために超能力を使うかな」

と言った。葵は、

「そうか。もし、おまえが悪いことをするために超能力を使うESPアイテムの所持者なら、俺はおまえと戦うことになる」

と言つて、薫に向かって鞘から抜いたESPダガーを突きつけた。

「そうかい」

「俺は人のために超能力を使うESPアイテムの所持者だからな」

「なるほどね」

「俺はおまえと戦いたくない。だからおまえが人のために超能力を使うESPアイテムの所持者であることを願うぜ」

葵はそう言つと、ESPダガーを鞘に納めて、エスパーから人間に戻つた。薫もエスパーから人間に戻つた。

「柳さん、ESPアイテムのことは、僕以外の者には秘密にしておこう。騒ぎになるから知られてはいけないよ」

「そうね。心配しないで、露草くん、ESPアイテムは京紫さん、有田さん、霧島くん、鈴代さんに見せたり教えたりしないわ」

葵はそれを聞いて安心した。綾原以外の者には秘密にしているESPアイテムのことをあやめ、瞳子、桐島、幸に知られてしまい、騒ぎになることがないからである。

「私、先教室に帰るわね」

薫はそう言うのと、教室に帰って行った。

こうして葵は薫と別れた。

「う……ん」

あやめが意識を取り戻した。葵は、

「あやめ、気がついたかい」

と言って、あやめに駆け寄った。

「あ、葵、体が宙に浮いて、落下してそれから」

あやめは落下して意識を失ったので、ESPアイテムによってエスパーに変身した葵によって、助けられたことを覚えていなかった。

葵はESPアイテムによってエスパーに変身し、超能力を使って受け止めたことはあやめに言えなかったのだ。

「僕が両手を出して受け止めたから、助かったよ」

と嘘を言った。葵はまじめで嘘をつくのは苦手だったが、本当のことを言ってしまうと、綾原以外の者には秘密にしているESPアイテムのことをあやめに知られてしまい、騒ぎになると思

ったので、頑張つて嘘をついた。

「え？ 落下したら危険な高さから落下した私を受け止められたの」

あやめはびっくりした。危険な高さから落下した人を受け止めると、受け止めた時の衝撃で、救助者の腕や脊椎が断裂し、命に危機が及ぶ可能性もあるのに、葵の腕は大丈夫だったからだ。

「うん。何とかね」

「信じられないけど、助かったのは落下したら危険な高さから落下した私を受け止めてくれた葵のおかげだから、礼を言わないとね。ありがとう、葵」

「どういたしまして。助けられた分、助けることができ良かったよ。助けられてばかりでは悪
いからね」

「葵」

あやめはにこつと笑つて小首を傾げた。

「あやめ、立てるかい」

「ええ、大丈夫よ」

あやめが立ち上がると、葵はあやめと教室に帰って行った。

葵があやめと教室に入ると、薫が瞳子、桐島、幸と一緒にいた。

薫は屋上で葵と話したESPアイテムのことをあやめ、瞳子、桐島、幸には話さないようにしている。葵はその様子を見てほっとした。

「柳さん、校舎を案内しようか」

「私も一緒に校舎を案内するわ」

あやめがそう言うのと、「私も」と瞳子と幸が、「俺も」と霧島が言ったので、葵は、

「みんなで一緒に校舎を案内しよう」

と言った。薫は、

「ありがとう」

と言った。薫にとって、校舎の外観を見た時にわかった屋上以外がわからないので、校舎を案内してもらえたらありがたかった。

「柳さん、みんなで一緒に校舎を案内するよ」

葵はあやめ、瞳子、桐島、幸と一緒に薫を連れて校舎を歩いた。

しばらくして、葵、あやめ、瞳子、桐島、幸の先輩である岩田 雅人が声をかけてきた。

「岩田先輩」

「おまえたち、何しているのだ？」

「僕たち、転校生に校舎を案内しているのです」

「転校生が来たのか。誰だ」

「柳さんです」

葵は薫を岩田に紹介した。

「柳です」

薫は岩田に名乗った。

「柳さんだね」

「柳さん、僕たちの先輩、岩田先輩だ」

葵は岩田を薫に紹介した。

「宜しくお願いします、岩田先輩」

「宜しく、柳さん」

薫と岩田は互いに挨拶を交わした。

岩田の顔の縫い傷が気になった薫は、

「岩田先輩の顔、どうしたのですか」

と言った。

「交通事故で怪我をしてしまったね」

岩田が交通事故によって顔に大きな傷を負ってしまったことを葵、あやめ、瞳子、桐島、幸は知っていたが、岩田の左目がESPアイテムのひとつである「ESPアイ」ということは知らなかった。ESPアイは人間の目と同じように見えるため、他のESPアイテムとは違い、見た目

はわからないからだ。このため薫に知られることはなかった。岩田は交通事故で左目を損傷したが、何処かの医者が実験的にESPアイテムのひとつである「ESPアイ」を眼球に移植させ、成功した。左目は光を取り戻し、今まで見えなかった物が見えたりする。だが、岩田は左目がESPアイということは気づいていなかった。

「では、岩田先輩、僕たちはこれで失礼しますね」

「ああ」

岩田と別れてから一通り校舎の案内が終わると、昼休みが終わるチャイムが鳴った。こうして薫の転校初日は終わった。

転校初日の翌日から薫は不登校になった。葵、あやめ、瞳子、桐島、幸は空席になった薫の席を見つめながら、薫が登校するのを待っていたが、登校することはなかった。

（綾原先生にESPアイテムの所持者である柳さんのことを話さないといけない）

葵はそう思うと、あやめ、瞳子、桐島、幸と一緒に保健室に向かった。

保健室に入ると、椅子に座ってタバコを吸っている綾原がいた。

「綾原先生、聞いてください」

「どうした？ 露草」

「僕のクラスにESPアイテムの所持者である柳さんが転校してきたのです」

「何と！ やはり我々以外に、ESPアイテムの所持者が、存在するということか！」

綾原は驚いて立ち上がった拍子に口にくわえていたタバコを灰皿に押しとした。

「はい」

「で、柳は？」

「転校初日から不登校になったのです」

「なぜだ？ 柳はどんなESPアイテムの所持者なのだ？」

「わからないです」

「それはいかんな、柳が不登校になった理由、どんなESPアイテムの所持者なのかわからないと、悪いことをするために超能力を使うESPアイテムの所持者であれば、大変なことになるぞ」
屋上でESPアイテムの話をしたあの時、薫が言ったことを、葵はふと思いつ出した。

——私以外に、ESPアイテムの所持者が存在していることがわかって、面白くなってきたよ

薫が不登校になった理由はもしかしてESPアイテムの所持者を探し当てたためかという当てがあった。もしそうだとしたら、ESPアイテムの所持者として、薫の動向が気になった。

「綾原先生、柳さんが不登校になった理由、どんなESPアイテムの所持者なのか確認します」
こうして葵は姿を消した薫の行方を追うことにした。

第二章

下校時間のチャイムが鳴った。

「葵くん、一緒に下校しよう」

あやめがそう言って、瞳子、桐島、幸とひとりですぐ下校しようとする葵に声をかけると、
「みんな、一緒に下校できなくて、ごめんね」

葵はあやめ、瞳子、桐島、幸に謝り、ひとりですぐ下校した。

「ちよつと、葵くん」

「おい、露草」

「あいつ、どうしたのだ」

「私たちがいつも一緒なのに……」

転校生の薫が不登校になってから下校時、あやめ、瞳子、桐島、幸といつも一緒にいる葵は薫の行方を追うため、単独で行動した。

(柳、どこにいる)

葵は綾原とエスパーに変身して、テレパシーで通話しながら、薫を探していた。ESPアイテムのことはあやめ、瞳子、桐島、幸に話すと騒ぎになるため、話せない。このため、葵はあやめ、

瞳子、桐島、幸に薫の行方を追っていることを隠していた。

あやめは薫が転校してきた日に葵とふたりきりでいた時に突然体が宙に浮き、落下したところを葵に助けられたという不思議なことが起きてから葵の様子がおかしい。葵は何か隠しているのではないかと感じていた。

「葵くんの様子がおかしいわね。葵くんは何か隠しているのではないかな」

あやめが瞳子、桐島、幸にそう言うと、

「ああ。露草の様子がいつもと違うよな」

瞳子は頷いて言った。

「露草は俺たちに隠しごとをしているのか」

桐島は怪しみながら言った。

「私たちに知られたくない秘密があるのよ」

幸がそう言うと、

「俺たちに知られたくない秘密があるのか、何だよ」

桐島はそわそわしながら言った。

「露草に聞いても、話してくれないわよ、悟」

幸は桐島を見て言った。

「わかってるよ、幸」

桐島は幸を見て言った。

「露草が話してくれるのを待つしかないわね」

桐島は頷いて、

「そうだな」

と言った。

あやめ、瞳子、桐島、幸は葵の様子がおかしい。葵は何か隠しているのではないかと話した。

翌日、葵はあやめ、瞳子、桐島、幸が下校したことを確認して、綾原に柳の行方がわからないため、どうすればいいかを相談しに保健室へ行った。

(柳さんとエスパーに変身して、テレパシーで通話しても、柳さんから応答がない。柳さんほどこを探しても見つからないため、どうすればいいかわからないので、綾原先生にどうすればいいかを相談しよう)

葵が保健室に足を踏み入れると、

「おお、露草」

綾原は葵に声をかけた。

「綾原先生、柳さんの行方がわかりません。どうすればいいでしょうか」

綾原は吸っていたタバコを灰皿に置き、

「柳の前籍校は」

と葵に聞いた。

「渚学園です」

葵が綾原に話すと、綾原は葵に会ったことはないが、知っているという渚学園の生徒である水を操る能力を持つ水神社の巫女について聞かせた。

「柳さんの前籍校に水を操る能力を持つ水神社の巫女がいるのですね。綾原先生は会ったことはないが、知っているということですね」

「ああ」

綾原は頷いて言った。

「名前は」

「清浄 水だ」

（清浄 水。名前の通り、水を操る能力を持つ水神社の巫女か）

「清浄は柳の前籍校の生徒だから、柳を知っているだろう」

（そうに違いない）

「清浄に柳について聞いてみてはどうだろうか」

綾原は灰皿に置いたタバコを手を持ち、吸いながら言った。

「はい」

葵は清浄なら薫の行方を知っているのではないかと思い、清浄に会いに、水神社へ向った。

（ここが水神社か。清浄さんに会って、柳さんの行方について聞こう）

葵が水神社の階段を上がり、鳥居をくぐると、境内を掃除している清浄がいた。

「渚学園の生徒、清浄 水さんだね」

葵が清浄に声をかけると、清浄は葵を見て頷き、

「あなたは誰？ 何をしに来たの？」

と言った。

「僕は紫陽花学園の生徒、露草 葵。清浄さんに会いに来た」

「柳さんが転校した学校の生徒ね。私に何か用かしら？」

「聞きたいことがあって」

「何かしら？」

「転校生の柳さん、転校初日の翌日から不登校になってね。教諭に聞くと、柳さんと連絡が取れず、柳さんの行方がわからないとのこと、行方を追っているのだけど、わからなくてね。清浄さん、知っているかな」

葵は水神社で清浄に会い、薫の行方について聞いた。

「知らないわね」

清浄は首を横に振りながら言った。

「えっ、柳さんときき合っているのでは？」

葵が清浄にそう言うのと、

「あまりつき合っていないわね」

清浄は首を横に振りながら言った。

「えっ。僕はてっきり付き合っていると思っていたよ」

「廊下ですれ違った時に挨拶しただけ」

「そうか。だったら知らないね」

「ええ、残念ながらね」

清浄は頷きながら言った。

「柳さんが転校しても、柳さんときき合っている渚学園の生徒はいないのかな」

「いるわ。西村ありすさんよ」

「柳さんの友人、西村ありすさんか」

「西村さんは柳さんが渚学園にいた時いつも一緒だったわ。柳さんが転校しても、柳さんときき合っているから、知っているであろう」

葵は清浄に薫とはあまりつき合っていないため、残念ながら、聞き出せない代わりに、薫とつき合っているため、薫の行方を知っているであろうという薫の友人、西村ありすについて聞いた。

「西村さんに会って、柳さんの行方について聞いてみるね」

「どうして柳さんの行方を追っているの？」

葵は清浄に尋ねられて、

「柳さんが僕と同じESPアイテムの所持者で、ESPアイテムを悪いことのために使う者かどうかを確認するためだ」

と答えた。

「柳さん、渚学園から紫陽花学園に転校する前はESPアイテムの所持者ではなかったのに、転校してからESPアイテムの所持者になったのね」

「うん」

葵は頷いて言った。

「柳さん、ESPアイテムの所持者か」

清浄はそう言うことから葵に「私もESPアイテムの所持者よ」と言おうとしたが、向き合っている葵の背後から突然火が発生して炎になり襲いかかった。

「危ない！」

葵は清浄にそう言われて、押しどかされた。

「あの炎は……」

葵は登校時、突然火が発生して炎になり、炎に包まれて、燃えて、綾原に介抱された過去を思い出した。

「不審火！ 火を消さないと、境内が燃えてしまう」

清浄は持っていた竹箒を地面に置いて、両手を前に突き出した。清浄の両手に水が集まり水球となった。

葵は清浄の水を操る能力を初めて見て、

「水を操る能力で水球を作り出した」

と言った。

「水球で炎を打ち消すわよ」

清浄は水球を放ち、炎を打ち消した。水球は炎を打ち消した衝撃で水がバラバラに飛び散った。

「危なかったわね」

清浄はハラハラしながら言った。

葵は炎にまた包まれて、燃えるのは勘弁して欲しかったので、水を操る能力を持つ清浄が助けてくれて良かったと思った。

「僕を助けてくれて、ありがとう」

清浄は葵に礼を言われるが、「勘違いしないで」と言わんばかりに、

「あなたを助けたのではなく、水神社を助けたのよ」

と言った。

葵が「僕も助けたのではないのかい」と言わんばかりに、

「えっ」

と言うと、清浄は笑いながら、

「冗談よ、あなたも助けたわよ」

と言った。

葵が地面に置かれている竹箒を拾い、

「清浄さん、竹箒」

と言って、清浄に渡そうとすると、黒いワンピースを着、黒いハイヒールを履いた女が現れた。

「何者だ」

「あなたは誰？」

「私はエスパ、天火 蓮華。あなた、水を操る能力を持つ人間ね。私の炎を打ち消すとはね。

より強い炎ならどうかしら」

黒いワンピースを着、黒いハイヒールを履いた女は発火能力（パイロキネシス）を持つエスパ

、天火 蓮華だった。天火は右手を清浄に向けて突き出した。天火の片手から炎が噴き出した。

「天火、火を発生させた張本人だね」

葵がそう言うと、天火は、

「そうよ」

と言って、炎を放った。

炎が清浄に向かって飛んで行く。

(より強い炎、水球で打ち消すのは無理だわ。ならば)

清浄は水を操る能力で水壁を作り出し、炎を防いだが、より強い炎のため、勢いにおされた。水壁の温度が高くなり、水が蒸発して水壁が薄くなる。

「水壁が……このままでは炎が水壁を貫通して、境内を燃やしてしまう」

「今度は僕が清浄さんを助けるよ」

葵がエスパーに変身して清浄を助けようとする、清浄は、

「私もESPアイテムの所持者よ」

と言って、エスパーに変身して、水を操る能力を強化して防御した。

(清浄のヘアアクセサリーはESPアイテムではないかと思っていたが、やはりESPアイテム) 葵は清浄に会った時から清浄のヘアアクセサリーが気になっていた。葵の思惑通り、清浄のヘアアクセサリーはESPアイテムのひとつであるESPヘアアクセサリー。清浄の水を操る能力を強化する効果がある。

ESPヘアアクセサリーの効果で水壁が厚くなり、炎を防いだ。

天火は炎を放つのを止め、

「あなたたちを発火能力（パイロキネシス）で襲った理由はあなたたちが所持している私が生み出したESPアイテムの効果を確認したかったから」

と言いつつ姿を消した。

「天火が消えた」

「どこかに瞬間移動（テレポート）したようだね。水壁はもう不要だな」

清浄が両手を下ろすと、水壁は水滴となって滴り落ちた。

「天火 蓮華」

「ESPアイテムを生み出したエスパーカー」

葵は清浄と天火を知ったと同時に「天火はなぜESPアイテムを生み出したのか？」と疑問を持った。

「天火の善悪の判断をつける」

「天火の善悪の判断をつけるか、露草。悪と判断すれば、どうする」

「戦う」

葵は天火の善悪の判断をつけ、悪と判断すれば、戦うことを決意した。

「清浄、これ」

葵は清浄に持っていた竹箒を渡した。

「ああ」

清浄は葵から竹箒を受け取った。

葵がエスパーから人間に戻り、手水舎の水で手や口を清め、参道を通って、拝殿に向かい、賽銭箱の前に立って会釈をし、賽銭箱に賽銭を入れ、鈴を鳴らし、深く二礼、二拍した後両手を合わせて祈念を込め、再び深く一礼し、参拝して、水神社を後にしようとする時、

「何を願った？」

と清浄に聞かれて、

「天火が悪ではありませんように、ESPアイテムを悪いことのために使う者がいませんように……とね」

と言った。

「そうか。願いが叶うといいな」

「うん。みんなのためにね」

葵は頷いて言った。

「あんた、やさしいね」

「僕は悪いことはしない。だからESPアイテムを悪いことのために使わない」

「そうか。私がESPアイテムを悪いことのために使う者ならどうする、戦うか」

清浄が葵にそう言うと、

「清浄さんは水神社の巫女だから、ESPアイテムを悪いことのために使う者ではないと確信しているよ」

葵はそう言って、水神社を後にした。

「ふふっ」

清浄はエスパーから人間に戻り、笑顔を浮かべて水神社を後にする葵を見送った。それから中断した境内の掃除を再開した。

翌日、葵はあやめ、瞳子、桐島、幸が下校したことを確認して、保健室へ行った。

葵が保健室に足を踏み入れると、

「おお、露草」

綾原は葵に声をかけた。

「綾原先生、清浄さんに会いに、水神社へ行ったら、天火が現れ、発火能力（パイロキネシス）で炎を放ちましたが、清浄さんが水を操る能力で水球を放ち、炎を打ち消しました。天火はESPアイテムを生み出した火のエスパー、清浄さんはESPアイテムの所持者でエスパーに変身すると、水のエスパーです」

葵は綾原に火のエスパー天火と水のエスパー清浄について話した。



「エスパーはいたか」

「はい」

綾原が吸っていたタバコを灰皿に置き、ネクタイに付けているESPネクタイピンを見て、
「ESPアイテムはエスパー、天火が生み出したのか」

と言うと、葵はベルトに仕込んだESPダガーを見て、

「はい、天火がそう言っていました」
と言った。

「水を操る能力を持つ清浄はESPアイテムの所持者か」

「はい、ESPへアアクセサリーをポニーテールに付けています」

「天火はなぜESPアイテムを生み出したのか」

「わかりません」

葵は首を横に振りながら言った。

「本人に確かめなくてはいけないな」

「本人に確かめて、悪のためにESPアイテムを生み出したなら、僕は天火と戦うことになりま
す」

葵は綾原から「天火と戦うことになれば、清浄と協力して天火と戦うことで、天火の発火能力
(パイロキネシス)に対抗できるだろう」と言われて、清浄との絆を深めた。

ESPER

著 者 アクア

イラスト まりも

発行日 2018年9月4日

メール webaqua@iris.ocn.ne.jp

ウェブ <http://www.webaqua.server-shared.com/>

※無断転載・複製・複写・ウェブ上でのアップロード、
ネットオークション・フリマアプリでの転売禁止。